

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | ステファヌ・ マラルメ 「ゴシップ 1875-1876」 『アシニーム』 (4)(翻訳)                                                                                                                                                                      |
| Sub Title        | Stéphane Mallarmé : "Gossips 1875-1876", Athenaeum (4) (traduction)                                                                                                                                               |
| Author           | Mallarmé, Stéphane(Harayama, Shigenobu)<br>原山, 重信                                                                                                                                                                 |
| Publisher        | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会                                                                                                                                                                                                   |
| Publication year | 2012                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.55 (2012. 10) ,p.47- 55                                                                                                          |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper                                                                                                                                                                                       |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20121019-0047">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20121019-0047</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ステファヌ・マラルメ

## 「ゴシップ 1875-1876」『アシニーム』(4)

### (翻訳)

原 山 重 信

承前

#### 17. 1875 年 12 月 27 日 最後の文を除いて掲載されず

##### 文学ゴシップ<sup>1)</sup>

一年のこの時期に、純然たる新年の書であるという口実で、フランスの文学ないし芸術の出版物に関して、絶対に沈黙を守るとするのは不当なことであろう。こうした書の出版は、「文学ゴシップ」にも「芸術ゴシップ」にも名を連ねるはずである。唯一つ感じるその出版を告げる躊躇はと言えば、それをどちらのゴシップに入れるべきかをいうことから来る。アシェット書店は、その壮麗な〈聖書〉から、ビダ<sup>2)</sup>の傑出した挿絵入りのアルバム、ルツ記を際立たせている。また同社はギゾーの『孫たちに語るフランス史<sup>3)</sup>』の出版を終える。魅力的で、重々しい作品であり、その最終第5巻が出る。それと同時に、博識で一風変わったエリゼ・ルクリュによる『新世界地理<sup>4)</sup>』の途方もない出版が始まる。

IV 芸術家、文学者の家庭、或いは単に教養のある上流社会の人々に熱い注目を浴びるべき、この例外的な2週間の作品は、『前史以来今日までの住居の歴史』である。これは『家の歴史』と『要塞の歴史』に対して、偉大なフランスの古い記念建造物の修復家にして、建築家のヴィオレ＝ル＝デュック<sup>5)</sup>が付け加える第3の書である。ヘッツェル社によって出版されるこの〈作品〉の画家であり、挿絵作家である。

- 1) このメモの最後の文だけが、かなり簡略化されて『アシニアム』1876年1月1日号、p.25に掲載された。後出、p.92を見よ。とはいえ、言及されている各書はつまらないものではない。
- 2) 『ルメートル・ド・サシー訳ルツ記』(A. ビダによる版画付)。パリ、アシェット社、1876年、2つ折大判、13p.——アレクサンドル・ビダ(1823–1895)挿絵画家、水彩画家、画家、石版画家。ドラクロアの弟子にしてその賛美者だが、その作風はあまり似ていなかった。東洋をよく旅した。とりわけ聖書と、1865年から1866年にかけてシャルバンティエ社から出版されたアルフレッド・ド・ミュッセの諸作品のイラストで知られる。アシェット社の社主の娘で、アンリ・ルニョーの婚約者だったジュヌヴィエーヴ・ブレトンの友人であった。——マラルメが当初「とても風変わりな挿絵」と書いていたことに注目しよう。
- 3) 『孫たちに語るはるか昔の時代から1789年までのフランス史』、ギゾー氏著、第1–4巻、第5巻は、父親のギゾー氏の構想とメモによるド・ウィット夫人(旧姓ギゾー)著。パリ、アシェット社、1872–1876年、全5巻、4つ折判。——フランソワ＝フィリップ＝ギヨーム・ギゾー(1787–1874)、ルイ＝フィリップ統治下の内閣の一員で、心ならずも1848年の革命を準備した。
- 4) 『新世界地理、地球と人間』、エリゼ・ルクリュ著、パリ、アシェット、1876–1894年、全20巻、4つ折判。——エリゼ・ルクリュ(1830–1905)地理学者、アナキスト。パリ・コミューンに参加し、スイスに亡命。
- 5) ウージェヌ＝エマニュエル・ヴィオレ＝ル＝デュック(1814–1879)偉大な中世の記念建造物の修復家で、若きポール・ヴァレリーを陶醉させた、重要な『11世紀から16世紀までのフランス建築の理論的辞典』(1854)でも知られる。『家の歴史』は1873年刊行。『要塞の歴史』は1874年刊行。

## 17.<sup>bis</sup> 1875年12月——1875年12月18日

### 文学ゴシップ

今から元日の書以外の書はなく、したがって、2箇月の選挙のため、あらゆる文学作品の出版はできないことが告げられている。今週の殆ど静寂の状態を利用して読んでもらおうとする必要もないほんの小冊子であるが、最もフランス的な書、それは『フィガロ』紙のよく知られた指導者の一人、フランシス・マニヤール氏<sup>1)</sup>による『或る実証主義者の人生と冒険』である。著者と同じ目線で見るとは限らない人たちにとってさえも、縦横に論理的に書かれたこの数ページの中だけでも、時折冷厳な論理に加わった得も言われぬ

観察の鷹揚さがある。その調子は常に的確で、良質の機知もある。



興味深い2作品を述べよう。一つは、ジュール・アレヌ<sup>2)</sup>による『親しみやすく雅な中国』という表題の遠い事柄についてのものであり、もう一つは、パリの事柄の通常の語り手、カトレル<sup>3)</sup>が見た、先の戦争の痛ましい特徴が一つならず感じられる『銃撃に』という名前である。

### 芸術ゴシップ

このところの芸術面の関心事は、パリでは、画家がそこに費やした10年の作業と、所有者であるアメリカ人スチュアート氏が投入した30万フランを物語るメソニエの大きな絵画である。主題はナポレオン1世の戦いであり、参謀部の中央にいる皇帝は敬礼を受ける騎馬隊の突撃がひっきりなしに続くのを戦闘の後方で見ている。この作品を見物するのを許された社交界の人びとは、僅かの信頼感をもってこの絵に見とれているが、一般の画家たちは、これを批判している。戦いの絵という点からは極めて時代遅れの手法で扱われており、その画家の、ここでは自在というよりは風俗のちょっとした主題にかくも傑出した才能においても、何ら目新しいものは示されていない。絵画における全ては、間違っただけで同じ価値をもつ。例えば、後方作戦に参画する部隊も前線の兵士たちと同じようにはっきりと、明確に描かれるのである。雰囲気は結局、伝統的な中庸をなすもので、こうしたモチーフの中でその真正な適用を見出すであろう現代的な戸外ではない。とはいえ、幾つかの部分は、その芸術家の完璧な定評ある熟達を立証している。

- 1) フランシス・ミニャール(1837-1894)は1863年に『フィガロ』紙に入り、1876年に編集長、次いで社長に就任することになる。その時評欄でマラルメに対して或る種の皮肉を示した後、この「ゴシップ」に対して詩人に謝意を示し、その死まで心のこもった交友関係を結ぶことになった。
- 2) ジュール・アレヌ(生没年不詳)翻訳家、中国研究者。詩人・小説家ポール・アレヌ(1843-1896)の兄弟。
- 3) カトレルこと、エルネスト・ルイ・ヴィクトール・ジュール・レピーヌ

(1826–1893) 文学者、作曲家。

## 18. 1876 年 1 月 3 日 掲載されず

### 芝居ゴシップ<sup>1)</sup>

パリの最も若い詩人の一人、リシュパン氏<sup>2)</sup>は、ブーショール氏<sup>3)</sup>の友人にして同時代人であるが、自ら主役を演じようと考えている有力な一つならぬの作品を劇場のために準備するだけでは満足せず、この芝居のシーズンの終る前に、大劇場の一つのマチネで『キーン<sup>4)</sup>』の役に取り組むというこの強烈な驚きを公衆に向かって引き起こそうとしている。



木曜日と日曜日は毎週、ヴィザンティーニ氏<sup>5)</sup>の指揮の下、マチネ音楽会が開かれ、若きフランス派の交響曲、オラトリオ、合唱付きの劇作品が上演されるだろう。ゲート座は、20 万フランの政府補助金を受け取ったばかりで、次の冬には歌劇場<sup>6)</sup>になり、マセ<sup>7)</sup>の『ボールとヴィルジニー』、ジョンシエール<sup>8)</sup>の『ディミトリ』およびマスネ<sup>9)</sup>の『エリニー』が上演されることになろう。『エリニー』はフランスのどの新聞よりも前に『アシニーアム』が最近告知した作品である。

- 1) これらのメモはどちらも取り上げられなかった。しかし 1876 年 1 月 8 日の『アシニーアム』は、カチュール・マンデスによって印刷され、ヴィザンティーニによって認められたゴージェの『カピテーヌ・フラカス』のオペラに言及している。このメモはマラルメの手になるものである可能性があるが、その原本は今日まで発見されていない（後出、p.93 を見よ）。
- 2) ジャン・リシュパン（1849–1926）アルジェリア生まれ。軍医の息子で、1868 年に高等師範学校に入学した。義勇軍で 1870 年の戦争を闘った。1873 年に劇作家、俳優として演劇デビュー。ボンシヨン、ロリナそして若きボール・ブルジェと共に、カルティエ・ラタンの結社を結成したことで名高い。『ならず者たちの歌』（1876）、『浮浪者』（1897）などで成功を収めた。『文芸共和国』誌に第 1 号から寄稿した。
- 3) モーリス・ブーショール（1855–1929）マラルメの友人の詩人、小説家。オ

気煥発の『陽気な歌』でデビューしたばかりであった。後に神秘主義的な理想主義へと転じた(『象徴』、1888年、1894年)。『文芸共和国』誌に寄稿した。

- 4) 『キーン』あるいは『無秩序と天才』、英国の俳優エドモンド・キーン(1787-1818)の人生を基にしたアレクサンドル・デュマ・パールの5幕散文喜劇(1836)。
- 5) ルイ＝アルベール・ヴィザンティーニ(1841-1896) 1866年からパリとロンドンの幾つかの劇場で指揮者を務め、1879年から1889年までサンクトペテルスブルクの帝国劇場の支配人、後にリヨンのオペラ座の支配人、パリのゲート座の支配人、最後にはパリのオペラコミック座の支配人となる。2つのオペレッタ、1つのバレエ、などの作者。
- 6) 1875年にジャック・オッフエンバックが引退する際、ゲート座の支配人として、その指揮者ヴィザンティーニを後継者にした。ヴィザンティーニは、数年来姿を消していた歌劇場の復興に取り組んだ。ゲート座に国立歌劇場の資格を与え、確かにマラルメが言及した新しいオペラを舞台に寄せ、『オペロン』、『セヴィリアの理髪師』、『獅子心王リチャード』などといった高名な作品も再演した。
- 7) フェリックス＝マリー＝ヴィクトール・マセ(1822-1884) オペラコミックの軽音楽の優れた作曲家で、『ボールとヴィルジニー』(3幕、1870年)が最もヒットした。
- 8) ヴィクトラン・ド・ジョンシエールことフェリックス＝リュドジェ・ロシニョール(1839-1903) 作曲家、音楽評論家。ワグナーの熱心な信奉者で、『サルダナパロス』、『ボンベイ最後の日』、そしてとりわけ3幕7場のオペラ『ディミトリ』(歌劇場、1876年、オペラコミック座、1890年)など幾つかのオペラを作曲した。
- 9) ジュール＝エミール＝フレデリック・マスネ(1842-1912) 『マノン』、『ヴェルテル』、『エロディアード』などの作曲者。——『エリニー』、ルコント・ド・リール作、2部古代韻文悲劇、オーケストラの序奏・間奏付き、マスネ氏の新しい音楽(パリ、オデオン座、1873年1月6日)パリ、A.ルメール書店、1873年、16折り判、64ページ。

## 19. 1876年1月9日——1876年1月15日

### 文学ゴシップ<sup>1)</sup>

フランス小説の巨匠の一人であるバルベイ・ドルヴィイ氏<sup>2)</sup>は、今日殆ど古典と言ってよい叢書に再版されている『年老いた情婦』、『魔法にかけられ

た女』、『騎士デ・トゥーシュ』などの作者であるが、恐らく彼の全批評作品中でも燦然と輝く有名な作品『ダンディズムと G. プランメルについて』も同叢書に出版しようとしている。この小冊子は、現代の〈装飾〉と〈服飾〉に関してさらに作らなければならない偉大な〈美学〉についてフランス文学がもつ最も目覚ましい断片である。彼は今世紀の服飾を取扱い、初めて美の観念をそれに結び付けている。あの有名な伊達男に関して最も興味深く、未発表の詳細が、そこにはふんだんに盛り込まれているのだ。

- 1) 『アシニアム』『文学ゴシップ』1876年1月15日号(p.91)を見よ。メモは6行に圧縮され、とりわけ最後から2番目の文、「恐らく彼の全批評作品中でも燦然と輝く有名な作品」という賞賛の言葉が削除されている(後出、p.94を見よ)。
- 2) ジュール＝アメデ・バルベイ・ドルビイ(1808–1889)「文芸の大元帥」は、彼の『「パルナス」の36の小円形肖像』の最も辛辣なものの一つをマラルメに割いていた。明らかに、マラルメは彼に何ら敵意を抱いてはいなかったようである。言及されている3つの小説は、それぞれ1851年、1855年、1864年に初版が出ていた。そして今、ルメール書店の『小文学文庫』に再版されている。マラルメは『半獣神の午後』がその第3シリーズに掲載を拒否されたばかりだった『現代高踏派詩集』の出版元であるルメール社の名を挙げるのをたまたま避けたのだろうか。——『ダンディズムと G. プランメルについて』は初めに1845年、カーンの B. マンセル社から出版され、次いで1861年にパリのプーレ＝マラシ社で、そして第3版が1879年にルメール社から『伊達男の中の伊達男』という書名で出た。

## 20. 1876年1月9日——1876年1月15日

### 文学ゴシップ<sup>1)</sup>

本紙の今週号が出るちょうどその頃、ヴァラード氏との協力によるモリエール生誕記念の韻文際物劇<sup>2)</sup>をオデオン座で上演する、『喚起<sup>ラベル</sup>』紙の傑出した文芸評論家にして詩人のエミール・ブレモン氏<sup>3)</sup>は、シェリーの『劇作品』の翻訳(本邦初)を終える。著者は、この作品の出版の後直ちに、この偉大な詩人の『抒情作品』の翻訳を開始し、フランスの人びとは遂にこの詩人の名前だけでなく、その実作品を知ることになろう<sup>4)</sup>。英文学に関する大

変注目された数々のページを書いたブレモン氏は、この偉業を最も良く成し遂げることのできる文学者の一人である。

- 1) 『アシニアム』1876年1月15日号、「文学ゴシップ」、p.91を見よ。メモは、賛辞がカットされ、3行に縮められた（後出、p.94参照）。
- 2) エミール・ブレモンとレオン・ヴァラードによる韻文1幕喜劇『オートゥイユにおけるモリエール』（パリ、オデオン座、1876年1月15日）。パリ、C. = レヴィ社、1876年。
- 3) ブレモンに関しては、前出、p.37、10番、註2、ヴァラードに関しては、同、註3を見よ。
- 4) これらシェリーの翻訳は書店から出版されたとは思われない。E. ブレモンが寄稿している数多くの雑誌のいずれかに発表されたのだろうか？ 英文学に関するページに関しても同様である。

## 21. 1876年1月16日——1876年1月29日

### 文学ゴシップ<sup>1)</sup>

Ⅷ シャルパンティエ書店のモーリス・ドレフー氏<sup>2)</sup>は、あの偉大な詩人の死以来、新聞、出版物或いはアルバムなどあちこちから、一旦書かれるや、この巨匠によって惜しげもなく出版されたテオフィル・ゴーティエのあらゆるページを蒐集するという困難且つ思いやりのある仕事を続行している。殆ど子供が親に対するような心遣いをもってなされたこの探究のお蔭で、既に我々は『同時代の肖像』『演劇』『ロマン主義の歴史』等を読むことができる。そしてここに初めて『全詩集』の権威ある書が2巻本で再版される。第1巻は目下、上梓されており、「アルベルトゥス」「エスパーニャ」を中心にまとめられており、第2巻は印刷中で、「死の喜劇」、それから1872年までの全詩が知られているものもそうでないものも織り交ぜて収められることになっている。唯一、『螺鈿七宝集』というゴーティエの詩作品の中でも特別な巻が、引き続き別に出版されるだろう。〈以前の序文〉、〈献辞〉、〈エピグラフ〉といった全てが復元され、さらに貴重なのは、著者が自作の詩の数々を並べた順序が、後にしばしば改変されていたのが、原状に戻されたことだ。この記念碑的作品は、いずれ、フランス語の榮譽のために出来る限りのこと



を成したこの作家の記念に捧げられるに違いない。そしてそのいかなる断章も後に失われてはならない。

- 1) モーリス・ドレフーと彼のゴーティエ死後出版作品の版に関するメモは、『アシニアム』1876年1月15日号、「文学ゴシップ」、p.163に出た。マラルメが常にゴーティエに対して捧げる固い敬愛の念が見て取れる最後の文は、英文テキストではカットされた（後出、p.95を見よ）。——ゴーティエが亡くなったのは、1872年10月23日のことである。
- 2) モーリス・ドレフー（1843–1924）シャルパンティエ書店の共同執筆者。テオフィル・ゴーティエの遺言執行人。マラルメは、エマニュエル・デ＝ゼサールを通じて1860年代初頭に彼を知った。『私がぜひ言いたいこと』『私がまだ言わなければならないこと』（パリ、オランドルフ社、1912–1913）という2冊の回顧録を残した。——彼はその中で、ゴーティエの死後出版作品の出版に関して詳しく述べ、彼がM. D.と署名した作品改題がマクシム・デュ・カンの手になるものとされていることを嘆いている。彼は当時、ゴーティエの作品が公有財産になるはずの1922年に向けて、自分が蒐集した未完の作品を10巻か12巻で出版するつもりであった。ドレフーの書類を誰が相続したのか、彼の計画を再開する価値があるのかが問われている。

## 訳者後記

本稿は、マラルメのフランス語原稿の翻訳の続き、第4回である。

底本にしたテキストは以下の通りである。

1. Mallarmé, *Œuvres complètes*, II, Édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2003, pp.416–440, 1698–1702. [今回訳出したのは、pp.430–434, 1701.]
2. Les *gossips* de Mallarmé, *Athenaeum* 1875–1876, textes inédits, présentés et annotés par Henri Mondor et Lloyd James Austin, Paris : Gallimard, 1962, pp.19–75. [今回訳出したのは、pp.51–59.]

体裁は、前稿を踏襲している。本稿の中には、1の新プレイアード版全集による新たな原稿の発掘がある。私が17.<sup>bis</sup>としたメモ群である。ここに言及されている諸作品も探索が求められよう。また同時代に書かれたマネ論に出て来る「戸外 *plein air*」に関する考えがここでも読み取れることにも注目したい。前回訳出した13番のゴシップも参照されたい。何度も言及しているように、これらのテキスト群はマラルメ研究者の間でも殆ど取り上げられることはないのだが、マネ論を論じる際の立証に寄与する文献にもなり得るものであることを一言述べておきたい。

今回も、読者各位には原文を片手に検証していただき、誤りの指摘やさらなる詳報を寄せていただくことを期待したい。